

4月27日(日)開催

生涯学習センターまつり

恒例となりました「生涯学習センターまつり」は今年もたくさんの方にお越しいただき無事終了しました！



国際交流ブースでは、フィリピンの伝統的なボードゲームやワークショップで、にぎやかに交流が図られていました。



「白ゆり」の抹茶のお点前。寺子屋まつだの中学生がお茶をたてて振る舞っていました。



展示ホールでは、生涯学習センター登録団体の「扶美吉会」による日本舞踊体験と「小田原かささぎ会」による競技かるたの体験が行われ、参加者は、伝統文化を味わいました。



寺子屋まつだの子どもたちが、ゲームコーナーのお店番になって、「いらっしゃいませ〜！」と会場を盛り上げました。



図書館の子どもコーナーでは、親子で読み聞かせを楽しんでいました。

生涯学習だより

問

生涯学習推進課
☎(83)7021

生涯学習係

松田 文化財探訪

My 二宮尊徳翁小伝 その2

文化財保護委員 草門 隆

著書からの尊徳翁の評価①

翁を語るにあたり、翁の概観を想像してもらうために、正論的著書と極少数意見の著書を、2回に分け記します。

翁が記した一万巻(国会図書館寄贈)を翁研究の第一人者で、元・小田原中学校教諭であった、佐々井信太郎が、昭和初期『二宮尊徳全集』全36巻・4万6000頁を編纂し、尊徳関連本の最重要著書と言われています。

その内容は、多岐に渡る日記・書簡・金銀米銭出入帳・各地で行われた報徳仕法(村再建・貧民救済)実績などで、これを尊徳研究者の下程勇吉は「全36巻は実にどこからも指一本さされることなき、実践記録として、公正証書のような性格をもつものである」(『天道人道』より)と述べています。

さらに「伝記」としては、

佐々井を始め、多くの研究者の本が際限なくあり、ユニークで、少し入れ込み感の強い、武者小路実篤は、「二宮尊徳はどんな人かと聞かれて、翁のことをまるで知らない日本人であったなら、日本人の恥と思う」などと書き連ねています。これらの著書の底本(よりどころの本)は、翁の死後直後に、富田高慶が著した翁の伝記『報徳記』で、明治天皇が高い評価を示され、当時官僚などに奨励し、時のベストセラーになったと言います。さらに、内村鑑三が、尊徳翁を『代表的日本人』の一人として、

外国向けに英文で、明治27(1894)年発刊しています。



『二宮尊徳全集』全巻(私蔵)